

宗教感話

欧州8カ国41都市の教会、修道院訪問の旅 西洋最古の修道院でランチに招かれた話

大学地球社会共生学部教授
大学宗教主任
藤原 淳賀
FUJIWARA Atsuyoshi



特別研究期間に、平和を作るキリスト教の霊性研究のため、2022年10月から2カ月あまり欧州の教会と修道院を訪問した。飛行機、電車、レンタカーを使い、かなりのスピードで8カ国41都市を回ってきた。多い日には1日で11の教会と修道院を巡った。しかし時には1つの教会に3日間。静まり、多くの祈りの時間。霊性の研究は、不可避的に祈りの巡礼の旅となった。

その中で、西洋最古の修道院でランチに招かれた話をお分かちしようと思う。

さて、チャペルという言葉がどこからきたかご存知だろうか？

4世紀にマルティヌスという人がいた。ローマの軍人だった。ある寒い日、アミアン（現フランス）の町に入ろうとした時、貧しい老人が寒さに震えていた。マルティヌスが持っていたのはケープのみ。可哀想に思った彼はケープを

2つに裂き、半分をその老人に与えた。みつともない姿となり、マルティヌスは人々に笑われた。夜、夢にイエス様が現れた。そしてその半分のケープをまといつておられた。マルティヌスはあの老人がイエス様であつたと知る。彼は洗礼を受け、聖職者になり、その時代を代表する指導者となる。そして彼の持つ半分のケープを保管していたところが、チャペル（ケープと同じ語源）となった。

修道院運動は3世紀に北アフリカのエジプトで始まるのだが、この聖マルティヌスが西洋最古の修道院をリグジェ（現フランス）に作る。ここで私は修道士の方と友人になりランチに招かれることになったのである。

前日の土曜日は、聖マルティヌスが司教となり、彼の聖遺物（頭蓋骨の一部）が置かれているトゥールの聖堂に行った。その日は1日トゥールを歩いて巡った。日曜日は聖マルティ



ヌスの修道院のミサに参列したいと思い、宿を朝早くチェックアウトした。修道院があると思われるリグジェまで120km運転した。修道院の場所もミサの時間とはつきりとはわからなかったが、そこまで行けばどうかなると思っていた。

どうにか到着し、古い礼拝堂を見つけて中に入った。電気はついていないのかもしれない。この修道院では礼拝は行われていないのかもしれないと思ひ、失意の中、周りを歩いた（悲しいことだが、しばしばそういうことがある）。すると白い鳩が私のほうに飛んできた！ 白い鳩が私のほうに飛んできたのは人生で初めてだったので驚いた。しばらくして鳩は飛び去っていった。しかしまたやってきた。

なんと5回くらい、行ったり来たり、私のほうに飛んできた。白い鳩は聖書では聖霊の象徴として描かれる。神の恵みと祝福と受け取り、感謝してその場を去ろうとした。

今日は、これからさらに300km以上の運転が待っている。間に合えば、隣のボワティエの教会でミサに出て移動を始めようと、ここを去ろうとした（732年のトゥール・ポワティエ間の戦いで知られる）。

歩いて車に戻る途中、修道院の建物に戸が見える。それを押すと、開いた。これはと思い、さらに奥に進むと、近代的な建物。さらに奥に礼拝堂。ミサが行われていた。

満席！ 礼拝後に修道院のブックストアが開く。資料と小物を買求めた。大柄の修道士の方が店番をしている。「クロイスター（回廊）とクリプト（地下）は見られますか？」と尋ねると、15時に開くという。「そうですか。これからまだ300km以上運転しなければならぬので、残念ながら、15時までここにいることはできないと思います」と伝えた。

その修道士の方と話をする中で、私が日本から来たこと、この修道院の大切さについてここまで来たこと、昨日は聖マルティヌスの聖遺物をトゥールの聖堂に訪ねたこと、今朝トゥールから120km運転してこのミサに来たことを伝えた。彼がこちらを見る。

また数年前に、聖ベネディクトがおられたイタリアのモンテカッシーノ修道院、アイルランドのグレンスタル・アビー（修道院）を訪ねたことも話した。一気に話が盛り上がる。この修



Abbey of Saint-Martin de Ligugé, 361年—現在

道院とグレンスタル・アビーは親しい関係にあり、私がお世話になった修道士の方々を彼も個人的に知っていた！ その時の写真をiPhoneで見せた。

このブックストアの方はピエール・インマヌエル修道士といわれるのだが、急に電話をかけた。他の修道士の方に店番を代わってもらい、私に修道院の中を案内するという。ていねいに親切に案内してくれた。

修道誓願を行う11世紀の建物。ここはまた、亡くなった修道士の遺体が葬儀前に安置される。多くの修道士がここに集まる光景は庄巻のとこと。

修道生活の中心、回廊。食堂、キッチン、アトリエ、庭、礼拝堂。

そして彼が修道服のフードをかぶる。特に聖なる場に入る時にそうするのだらう。階段を下りる。聖マルティヌスが最初に作った修道院の4世紀の地層。考古学調査が行われていた。これには驚いた。

ここで、ピエール修道士が「共に祈ろう」と。聖マルティヌスが歩まれた4世紀の土の上で、日本のために、フランスのために、世界の平和のために共に祈った。

た。

ピエール修道士は「修道院で一緒に食事をしてませんか」と2度も誘ってくれた。

しかし「これから300km以上運転しなければならぬので、ちょっと難しいと思います」と残念ながら断った。知らない町での夜の長距離運転は避けた。

回廊を歩いて、3度目に彼が誘ってくれた時間に、ちょうど食事係の修道士の方が向こうから来られた。「これは神様の導きに違いない」とピエール修道士。「ぜひ一緒に食事をしましょう」と誘ってくださったので、お受けした。

食事係の修道士の方は、「今から人数変更?!」と驚いていた。調理師の方が嫌がるとのこと。それはそうだと思う。もう食事の直前なのだから。しかし回廊を歩いている間に、向こうからOKサインを出してこられた。そういうわけで、修道院長に紹介していただき、18人の修道士の方々と共に食事をいただいた。

食卓には、水とワイン（水をいただく）、前菜（レタスと肉料理）とパン、メイン（チキンとライス）、チーズ、デザート（アップルパイ）。ベネディクト会の食事は無言。その間、1人の人が有益な本を朗読する。食事の前と後にそれぞれ15分の祈りが礼拝堂で捧げられる。美しい聖歌。そして共に回廊を歩いて移動する。そこには規律がある。また優しさと配慮があつた。

西洋最古の修道院で、温かいお交わりをいただいた。

ピエール修道士が連絡先をくれた。それ以来、温かいつながりになっている。